

ノーベル賞・大村智先生と青木繁

天才画家の「熱」と「輝き」を共有

吉武 研司



大村智さん

大村智先生と青木繁、ノーベル賞の科学者と夭折の天才画家

「海の幸」会は大村先生を理事長に頂き、青木繁が「海の幸」を描いた「小谷家」(千葉県館山市)の修復・保存を目指す運動を続けてきました。6年間の活動を経て、近く目標額に達し、修復を終え、来年4月には一般公開が始まる予定です。

私は佐賀西高生の頃、美術部の石橋美術館(福岡県久留米市)見学で「海の幸」に感動し、熱に浮かされ画家を志し上京しました。それから30年後、女子美術大の学生とスケッチ旅行に行った布良(千葉・館山)の海岸。時空を超えて「海の幸」の熱気がぶり返しました。「ここであの絵が生まれたのだ」と思った時に鳥肌が立ちました。「海の幸」が描かれた小谷家を「絵描

きの聖地」として残したいと思ったのでした。

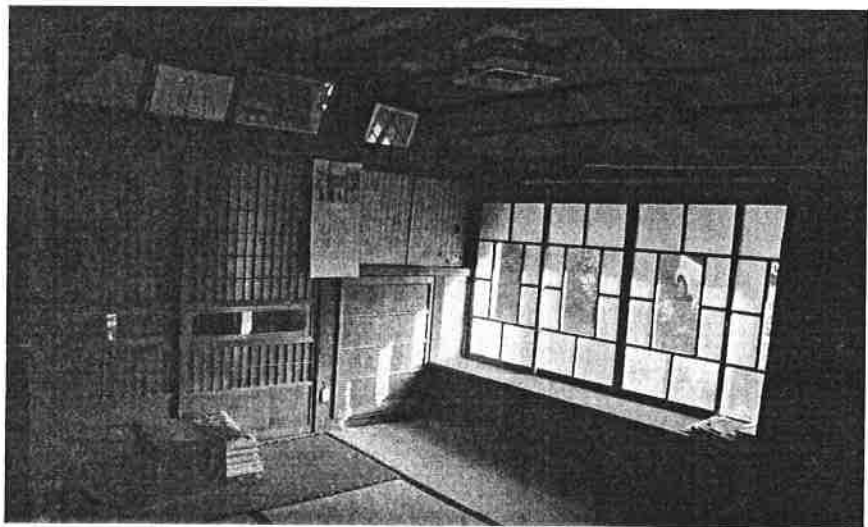
久留米出身の画家吉岡友次郎氏と出会い、小谷家保存に向けたNPO法人設立を計画する中で、当時、女子美大の理事長だった大村先生と繋がるのです。

「海の幸」は「青木繁の青春」

ティーン絵画展では、その都度作品を購入されるなど、常にこの運動を後押しし、元気づけてもらいました。

入江観先生(女子美名誉教授)を通じて理事長就任を依頼すると、大村先生はすぐに「小谷家」を訪ね、修復のプランを把握し、資金面も計画し、引き受けていただきました。その後の動きは迅速でした。

新婚旅行に館山を訪れたのが「海の幸」との繋がりを強めた、とも話されています。修復・保存費用として私財300万円を寄付され、東京や福岡などで計12回開いたチャリ



千葉県館山市にある小谷家。1904年夏、青木繁はこの部屋で「海の幸」を描いた

(2011年撮影)

のピークに制作された作品で、近代に踏み出した「日本の青春」と交差し、その息吹を記録した傑作とも言えます。そのイメージは若い絵描きの精神の血を湧かせあおって、脳に刻印する力を持っています。青木と坂本繁二郎、福田たね(青木の恋人)、森田恒友の房総への旅は1904年。神話を研究していた青木は海の神を祭る安房神社を訪ね、海に遊びました。ある日、坂本から大漁の素晴らしい様子を聞き、いきなり美の女神が舞い降り、宿泊していた小谷家で現場を見ずしてあの絵をイメージしたのでした。

大村先生は絵が大好きで、才能を愛し、美を深く愛しています。作品をコレクションし、奨励制度を設け、病院をたくさん、の絵で飾り、美術館をつくり、後輩を育て、人を助け、北里大はもちろん女子美の発展にも尽くされました。「人のために生きる」と信条とする先生の判断と能力は、様々なところで発揮されてきたことでしょう。

大村先生に初めて会った時は「ピリッ」とする厳しい印象でした。しかしいったん話すと優しく、笑いが出てくる感じが、昔のおやじのイメージがあります。意志が強く、きちんと生きておられる感じがひしひしと伝わってきます。

◇

「海の幸」を描いた22歳の青木繁の「熱」はきつと大村先生に伝染し、「海の幸」のイメージの輝きも共有されているのでしよう。

文化

ファクス 092(711)6243
メール bunka@nishinippon.co.jp

よしたけ・けんじ 画家。1948年佐賀市生まれ。NPO法人「青木繁『海の幸』会」理事、元女子美術大教授。独立美術協会会員。